

小 学 校

平 成 17 年 度

# 教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

道

徳

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

目 次  
社会にすすんで参加しようとする心を育てる  
～互いの心に響き合う道德の時間～

目次	.....	1
I 研究主題について	.....	2
1 主題設定の理由	.....	2
2 研究の手だて		
II 研究の構想	.....	4
III 実践事例	.....	6
1 低学年	.....	6
2 中学年	.....	11
3 高学年	.....	16
IV 研究の成果と課題	.....	21
V 実態調査	.....	22

## 研究主題 **社会にすすんで参加しようとする心を育てる**

～互いの心に響き合う道德の時間～

### I 研究主題について

#### 1 主題設定の理由

児童は、様々な社会集団とのかかわりの中で価値観を形成し、自己の役割や責任を自覚しながら、社会を担う一員として生活する力を身に付けていかなければならない。

しかし、児童の教育をめぐる環境については、社会への参画意識の希薄化や、なかなか社会人として自立できない若者の増加が指摘されているのが現状である。（東京都教育ビジョン・第1章）

また、児童の課題としても、友達や身近な人々との人間関係づくりの経験不足から集団とのかかわりがうまくもてないことや実態調査（p23・24）に現れているように、学校での仕事や家庭での手伝いに対して積極的な姿勢で取り組めていないことなどが挙げられる。

このような課題に対し、学校教育では、家庭や地域社会と連携して、児童が社会の中で自立した人間として成長するために必要な働く意欲や態度、集団の中で人と協力する気持ちなどをはぐくむための指導の一層の充実を図る必要がある。

東京都教育委員会が平成19年度より都立高等学校において実施する、東京都設定教科・科目「奉仕」も、青少年のこうした課題に対する方策の一つと考えられる。

小学校の道德の時間においては、これらの課題解決に向けて、規範意識や健全な職業観の基礎となる道徳的実践力を養っていくことが大切である。

そこで、本部会では、上記の課題にかかわる道徳的価値について取り上げ、自己を見つめさせることで、課題解決につながる内面的資質の向上を図ることが重要であると考え、研究主題を「社会にすすんで参加しようとする心を育てる」と設定した。

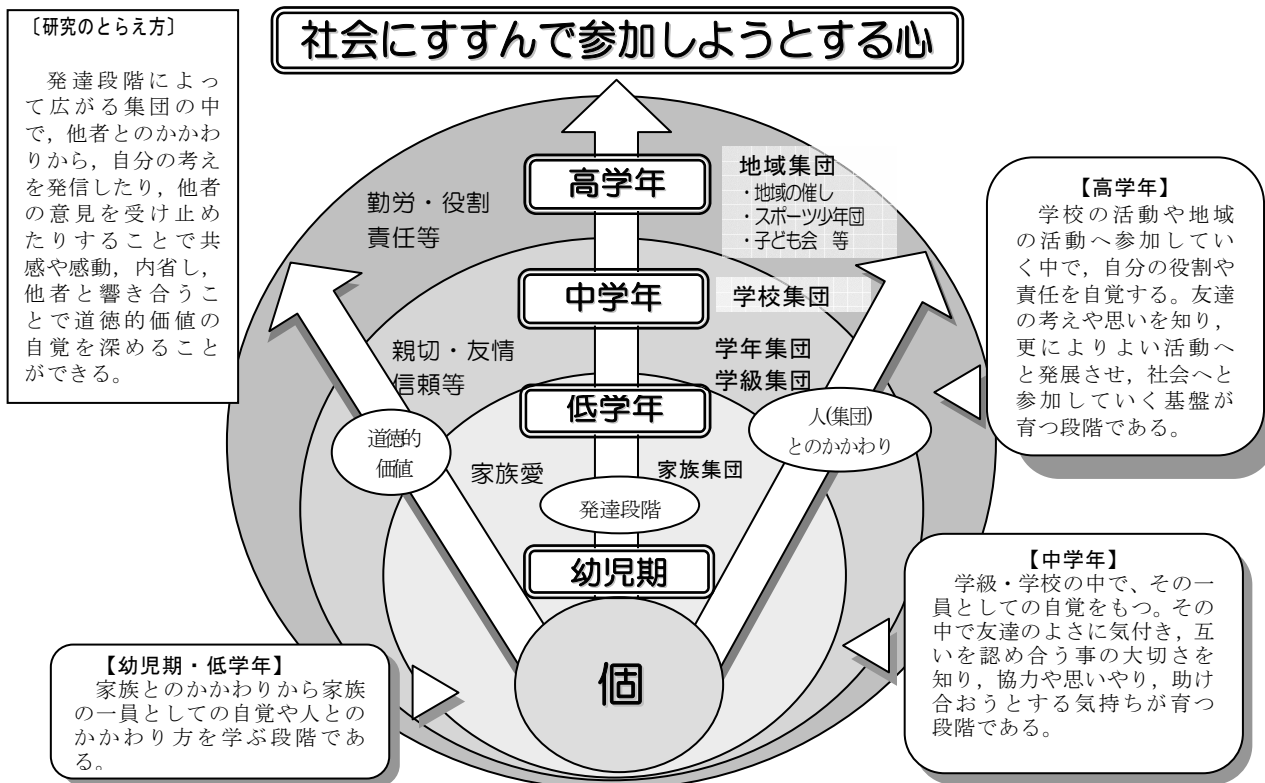
また、児童が友達と意見を交換することで多様な感じ方や考え方に気付き、自分の意見を深く見つめながら互いに高め合うための手だてを設定することで、児童の道徳性を一層はぐくみ、社会に参加する際に必要なコミュニケーション能力を伸ばしていくことができると考え、副主題を「互いの心に響き合う道德の時間」と設定した。

#### 2 研究の手だて

本研究では、まず発達段階に応じた社会参加の姿を明確にし、それに応じた育てるべき力・態度、響き合いの姿を設定した。（右ページ・図1）取りあげる道德の視点については、低・中学年では、身近な人とのかかわりを見つめさせることが大切だととらえ「主として他の人とのかかわりに関すること」と「主として集団や社会とのかかわりに関すること」とした。また、高学年では働くことの大切さや役割と責任の自覚が重要であるととらえ「主として集団や社会とのかかわりに関すること」とした。

副主題にある「互いの心に響き合う」については、「資料や教師の発問を通して児童一人

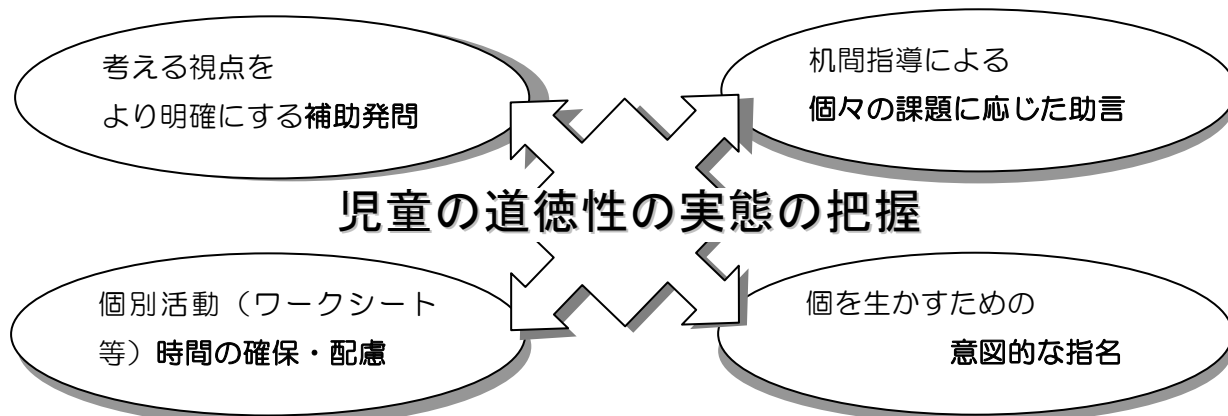
(図1)



一人が登場人物の気持ちや自分自身のことを考え、伝え合う中で、友達の考えと自分の考えを比べたり、自分の意見や考えをさらに深く見つめたりしながら、道徳的価値の自覚を深めていくこと」であるととらえ、特に「発問」と「表現・話し合い」に着目し、指導の工夫を試みることにした。

本年度教育研究員の共通主題である『個に応じた指導の一層の充実』については、観察法やワークシート、日記などから児童の道徳性の実態を把握し、それを基に図2のような4つの手だてを講じることとした。なお、児童の道徳性の把握については、「授業で期待した変容」をはじめとして、長期的な視野で評価していくように心がけていく。

(図2)

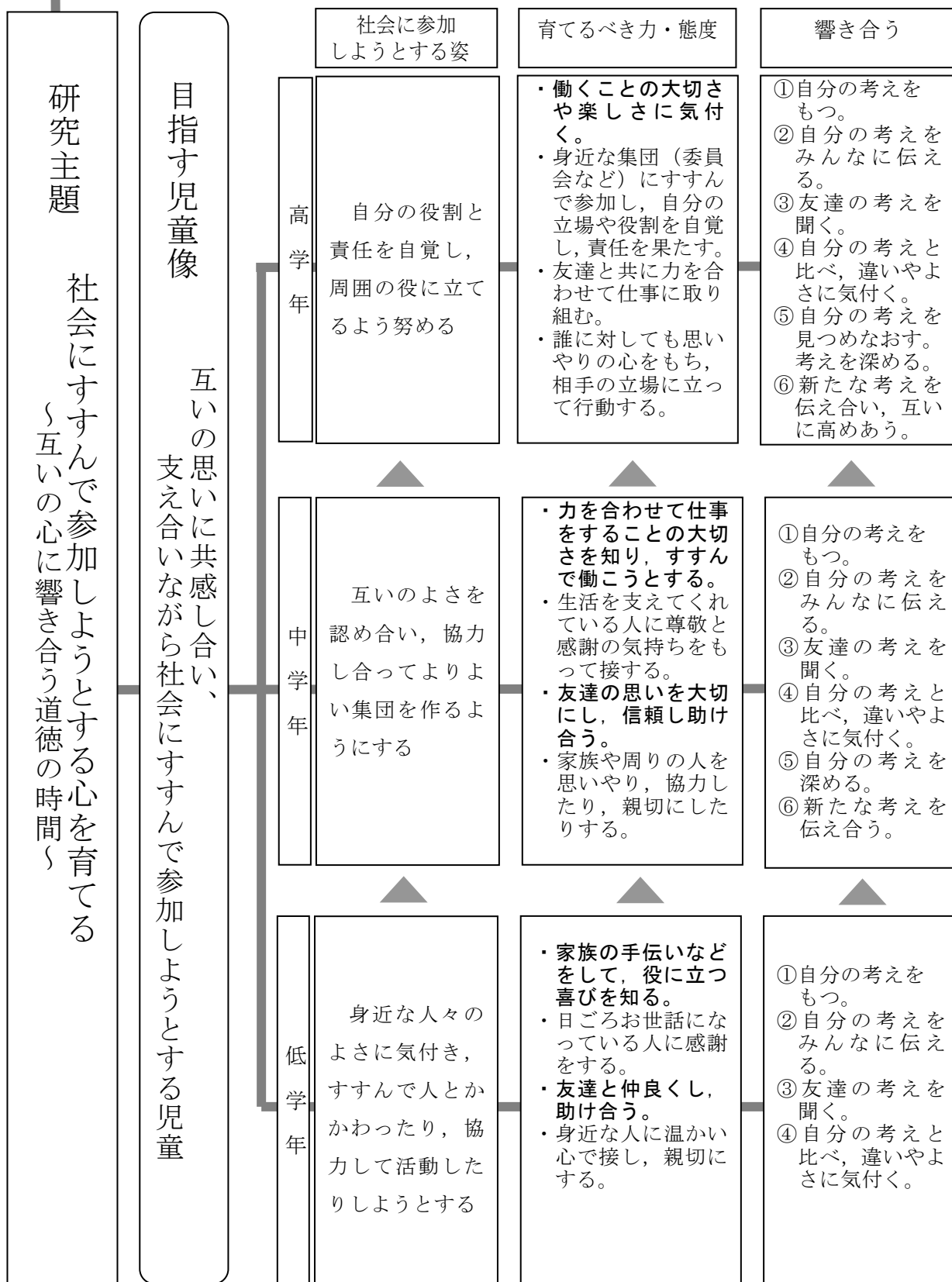


また、研究をすすめるにあたり、研究員同士の相互研鑽を図るための、学年グループおよびリーダーを設け、小グループによる研究を重視した。

II 研究の構想

東京都教育ビジョンが示す人間像

社会の一員として、社会に貢献しようとする人間





### Ⅲ 実践事例

#### 1 低学年分科会（2学年の指導事例）

- (1) 主題名 友達っていいな 2－(3) 信頼・友情
- (2) 資料名 「くりのみ」 出典『みんなのどうとく』（学習研究社）
- (3) ねらい 友達の立場を思いやり、互いに助け合おうとする心情を育てる。
- (4) 研究主題とのかかわり

＜低学年における社会に参加しようとする姿＞

身近な人々のよさに気づき、すすんで人とかかわったり、協力して活動したりしようとする

＜低学年における育てるべき力＞

- 家族の手伝いなどをして役に立つ喜びを知る。
- 日ごろお世話になっている人に感謝する。
- 友達と仲良く助け合う。
- 身近な人に温かい心で接し、親切にする。

低学年分科会では、社会にすすんで参加する力を育てるためには、友達や家族という身近な人とかかわる中で自分や他人のよさに気付かせながら、求められる役割を自覚させ、さらにかかわりを深めさせることができると考えた。

友達との間での求められる役割とは、友達の思いや考えを受け止めることや、友達が困っていたら手を貸し助け合うことなどがあげられる。

また、家族の中での役割とは、家族の愛情に気づき、感謝の気持ちをもつことや、家族の一員として、すすんで家の手伝いなどをするのである。

実態調査（p22・2-低）からは、道徳の時間で友達の発表に「なるほど」と思う児童が8割以上おり、友達の意見に対する関心は高く、考えを受け止めようとする傾向が見られた。しかし、実際の学校生活では、相手の立場や気持ちを推し量って行動しようとする力が十分でなく、友達同士仲良くし助け合うことを苦手としている傾向が見られた。

そこで、本時の授業では、上記の育てるべき力のうち、「友達と仲良くし、助け合う」ことに重点を置き、身近にいる友達と仲良く活動し、助け合おうとする姿勢を育てることを主なねらいとした。

身近な人々のよさに気づき、すすんで人とかかわったり、協力して活動したりしようとする児童を育成するために、互いに思いを響き合わせることが有効であるかを以下の資料及び研究の手だてを通して検証することとした。

- (5) 資料について

「寒い北風の吹くある日、おなかをすかせたきつねと友達のうさぎが、それぞれ食べ物を探しに行く。きつねはたくさんのだんごりを見付けそれをおなかいっぱい食べ、さらに、残った分を落ち葉でかくす。帰り道、うさぎに出会ったきつねは「見付かりましたか」という問いに対し、自分が何も見付けられず腹ぺこだとうそをつく。それを聞いたうさぎは、たった二つしか見付からなかったくりのみのひとつをきつねに渡した。きつねはうさぎの温かい心に触れ、くりのみをにぎりしめるとぼろっと涙をこぼす。」

この資料を通して、友達を思いやり助けようとするうさぎの気持ちに自分本位な行動をとったきつねの立場から触れることにより、友情の大切さに気付かせ、友達に優しくしようとする心情を育てたいと考えた。

(6) 響き合うための研究の手だて

ア 発問の工夫

A ねらいに向き合うための発問

- ・個々の児童が自分のもっている価値観に基づいて、主人公や登場人物の気持ちを考えられる具体的な発問。

B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめるための発問

- ・自分と家族、友達のよさに気付かせ、身近な集団とのよりよいかかわり方について考えていく発問。

Aについては、くりのみを分け与えたうさぎの行動と、うそをついたきつねの行動を対比させた上で、涙を流したきつねの気持ちを考えさせた。それにより、児童は登場人物に共感したり反発を感じたりすることで自分の考えをもつことができ、ねらいに向き合わせることができると考えた。

Bについては、友達とのかかわりを振り返らせ、さらにその時の気持ちを思い出させることにより、友達のよさに気づき、その関係の心地よさを味わわせるよう試みた。それがこれからも友達とよりよい関係を築いていきたいという意欲につながると考えた。

イ 表現・話合いの工夫

C 自分の考えを表現するための工夫

- ・発問の意図をとらえやすいように登場人物の挿絵や吹き出しを利用し、児童が自信をもって発表できるようにしたワークシートの活用。
- ・自分とは異なる立場で考えるための、動作化、劇化、ペープサートなどの活用。

D 考えを深めるための話合い

- ・ワークシートを書く場合

自分の考えを書く → 友達の発表を聞く → 自分と同じや異なる友達の考えに気付く

Cについては、くりのみを差し出すうさぎと、涙をこぼしたきつねの挿絵と吹き出しを利用したワークシートを使用することにより、場面を想起する手助けとなり、きつねの気持ちがより考えやすくなると考えた。また、中心発問ではないが、動作化を取り入れ、くりのみを隠すきつねの思いに触れさせていく。これは、一人だけで食べてさらに隠そうとするきつねの行動を十分意識させ、うさぎの食べ物は見付かったかという問いに対し、とっさに嘘をつくきつねの自分本位な行動をより意識づけるものである。2つしかないくりのみを「友達だから」と分けてくれるうさぎの優しさとの対比に効果的であると考え、取り入れることとした。

Dについては、ワークシートに記入しておくことにより、児童が自分の意見に自信をもって発表できると考えた。また、発表を聞く際にも発表の際にも友達の考えと自分の考えを



見比べることができ、互いの考えの違いやよさに気付くことができると考え、ワークシートは有効であると考えた。

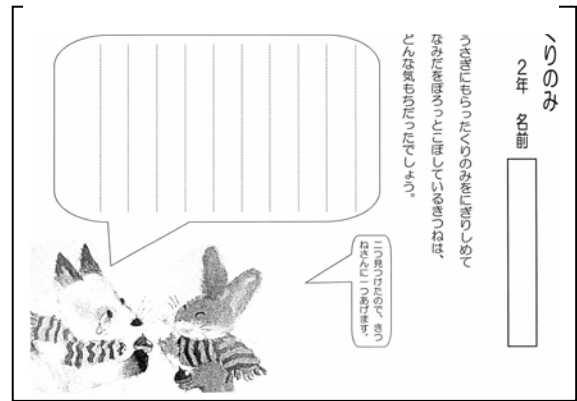
ウ 本授業における期待する「響き合う姿」

本時では、中心発問できつねの立場から、相手を思いやったうさぎの行動に触れ、優しさについて考えた。

きつねが自分の行動を反省し、「友達っていいな」と感じることに共感させたいと考えた。

自己中心性がまだ残りがちな低学年の児童が、きつねの立場からそれぞれの価値観を基に考え、伝え合う姿を「響き合う」ととらえた。

さらに、展開後段では「友達っていいな」と思った今までの経験を発表し合った。それにより、今まで自分には見えていなかった友達や自分自身の姿を知ることになった。それぞれが自分の思いをもち、伝えること、さらに友達の思いを聞き、自分との違いやよさに気付くことを「響き合う姿」ととらえ、響き合うことの心地よさを感じさせながら授業を進めていきたいと考え、展開した。



(板書計画)

<p><b>場面絵②</b> なみだをぼろっとこぼす</p>	<p>なみだをぼろっとこぼしたとき</p>	<p><b>場面絵①</b> どんぐりをかくす</p>	<p>どんぐりをかくしたとき</p>	<p>きつね たべものをさがしに行く</p>	<p>うさぎ</p>	<p>くりのみ</p>
<p>・ごめん、ぼくうそをついていたよ。 ・なんてずいことをしたんだらう</p>	<p>・おなかいっぱい たべたぞ ・あとでまたたべよう</p>	<p>・しばらく考えて ・しなびたくりのみ</p>	<p>くりのみをひとつあげたとき</p>			
<p><b>場面絵③</b> くりのみをきつねにあげる</p>		<p>・ふたつしかないけど、きつねさんにあげよう。 ・こまったときはたすけあいたいから。</p>				

(7) 展開

	学習活動（主な発問と児童の反応）	○指導上の留意点 ☆個に応じた手だて
導入	<p>1 話の舞台について聞く。</p> <p>○資料の概要を話す</p> <p>（ある森での友達の話です。寒い冬に近づいています。動物にとってえさ探しは大変です。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・冬になったら、雪が隠しちゃうものね。</li> <li>・寒そうだな。</li> </ul>	<p>○寒い季節になると、動物たちはえさ探しが大変だということをおさえる。</p>
展開	<p>2 資料「くりのみ」の紙芝居を見て、登場人物の気持ちを中心に話し合う。</p> <p>○食べ物を探しに行くきつねはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おなかですいたよ。</li> <li>・はやくみつかるといいな。</li> </ul> <p>○残ったどんぐりをかくすとき、きつねはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見付けられてよかったな。</li> <li>・お腹いっぱい食べたぞ。</li> <li>・もう食べられないから後で食べよう。</li> </ul>	<p>○食べ物を見付けたいと強く思っていることをおさえ、次の発問につなげていく。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>C きつねの行動を動作化させ、きつねの気持ちに、より近づける。</p> </div> <p>①食べる→隠す動作をする。 ②そのときの気持ちを発表する。</p>
展開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>A くりのみをにぎりしめ、涙をこぼしたきつねはどんな気持ちだったでしょう。（中心発問）</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごめん、ぼく、うそをついていたよ。</li> <li>・うさぎさんは、なんて優しいのだろう。</li> <li>・ぼくのもの、うさぎさんにわけてあげよう。</li> <li>・ありがとう、ぼくもこれからは友達を大切にしよう。</li> </ul>	<p>☆板書で二者の行動を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>D 相手を思いやったうさぎの気持ちに触れてから、ワークシートに記入し、話し合う。</p> </div> <p>☆机間指導し、書けていない児童にアドバイスし、意図的指名に役立てる。</p>
展開	<p>3 自己の振り返りをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>B 友達っていいなと思ったことはありますか。そのときの気持ちはどうでしたか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高いところのものを取るときに届かなかったのを、取ってくれてうれしかった。</li> <li>・重い荷物を一緒にもってくれてうれしかった。</li> </ul>	<p>☆意図的指名をし、多様な考えを出し合い、考えを深められるようにする。</p>
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>○教師が子どもころの、友達に関する体験を話す。</p>

- (8) 評価
- ・友達っていいなと思うきつねに共感することができたか。
  - ・友達を思いやり、助け合おうとする心情が育ったか。

## (9) 考察

〈社会に参加する姿について〉

友達を思いやり、助け合うことよさに気付いたことで、互いに誘い合って遊んだり、共に植物に世話をしたりするなど友達と協力して活動する姿がみられた。

〈響きあうための研究の手だてについて〉

ア 発問の工夫

### A ねらいに向き合うための発問

板書で二者の行動を整理し、心情を追った上できつねの気持ちを問う発問をしたところ、「たった一つしかないのにくりのみをくれたうさぎさんはなんて優しいのだろう」など友達の優しさに触れ、感動する気持ちや、互いに助け合おうとする気持ちなどの個々の考えを引き出すことができた。また、なかなか考えが深められない児童も、友達の意見を聞き、それを参考にして、自分なりの考えをもつことができた。

### B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめるための発問

友達のよさに気付かせる発問をしたところ、「けがをしたとき、保健室に連れてってくれてうれしかった」「給食を配膳してなかったら、友達がやってくれてうれしかった」など、助け合うという視点での考えを引き出すことができた。このことから児童が自分と友達とのかかわりを見つめることができたと考える。友達に助けられてうれしかったという意見を多く引き出せたが、今後は自分が友達を助けてあげたときの気持ちにも気付かせていく方策の検討が課題である。

イ 表現・話し合いの工夫

### C 自分の考えを表現するための工夫

きつねの立場に立って考えるために、見付けたどんぐりをかくす場面に動作化を取り入れた。資料を読み終わったところでは、うさぎに共感し、きつねを批判する気持ちで見ていた児童もいたが、この動作化により、空腹を満たすためについかくしてしまったきつねの気持ちに寄り添うことができた。それが、この後のうさぎと再会した場面で、嘘をついてしまうきつねの行動を自分のことのようにとらえることにつながり、効果的であった。

涙をこぼしたきつねの気持ちを考えさせたところで、ワークシートを活用した。発問の意図をとらえやすいように登場人物の挿絵と吹き出しを使ったところ、児童が自分の意見をまとめることができ、さらに発表するときの自信にもつながった。

実態調査（p221-低）では「あなたは、道徳の時間で、発表するのは好きですか」という質問に対して、「きれい」、「とてもきれい」と答える児童が2割強いた。しかし、発表することに苦手意識をもっていた児童も、机間指導をしながら教師の励ましや助言によって自信をもたせその上で意図的指名をすると、自分の意見に自信をもって発表することができた。このことから自分の考えを表現するためにワークシートの活用は有効であった。

### D 考えを深めるための話し合い

教師がワークシートを見て意図的指名や自信をもたせる助言をしたことで、普段はなかなか発表できない児童も発表でき、話し合いをより活発にすることができた。また自分の考えを書きとめることで、話し合いのときに見比べ、自分と異なる考えに気付くこともできた。

## 2 中学年分科会（4学年の指導事例）

- (1) 主題名 友達のよさを見付ける 2－(3) 信頼・友情
- (2) 資料名 「ブラジルからの転入生」 出典『ゆたかな心』（光文書院）
- (3) ねらい 一面的な価値観で友達を見ず、友達のよい面を見付けようとする心情を育てる。
- (4) 研究主題とのかかわり

<中学年における社会に参加しようとする姿>

互いのよさを認め合い、協力し合ってよりよい集団をつくろうとする。

<中学年における育てるべき力>

- 力を合わせて仕事をする事の大切さを知り、すすんで働こうとする。
- 生活を支えてくれている人に尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
- 友達の思いを大切にし、信頼し、助け合う。
- 家族や周りの人を思いやり、協力したり、親切にしたりする。

中学年分科会では、社会にすすんで参加する姿を「互いのよさを認め合い、協力し合ってよりよい集団をつくろうとする。」とし、さらに上記の4点を中学年における育てるべき力と考えた。そのためには、家庭や学級という集団の一員として、互いのよさを認め合い、協力し合うことが大切である。

実態調査（p23・24・5-1・6-1）の結果、半数以上の児童が学校でも家庭でも自分の仕事を一生懸命やろうとしており、自らの仕事や役割に関する意識があることがわかった。しかし、「決まりだからやらなくては」や「したくないけれど、しかたがない」といった回答をした児童も3割程度おり、道徳の授業を通して働くことの意義や大切さについての考えを深めていくことが必要であると考えた。

本時の授業では、中学年として育てるべき力の一つ、「友達の思いを大切にし、信頼し、助け合う」ことに重点を置き、学級集団の一員として友達とのかかわり合いの中で互いに理解し合い、個性や違いを認め合いながら、よい面を生かして助け合って生活していこうとする姿勢を育てることを主なねらいとした。

互いのよさを認め合い、協力し合ってよりよい集団をつくろうとする児童を育成するために、互いに思いを響き合わせることが有効であるかを、以下の資料及び研究の手だてを通して検証することとした。

### (5) 資料について

「ブラジルから転入してくるセルシオくんに対し、ひろしたちは、サッカーがうまいはずだという一方的な期待を寄せる。しかし、セルシオくんはサッカーが苦手であった。ひろしたちは、自分たちの期待を裏切られた思いからがっかりしてしまうが、のり子さんの言葉で一面的な見方をしていた自分たちに気付かされ、その後、セルシオくんの様子を見つめ直すことによって、彼の陽気な性格というよさが少しずつ分かってくる。」

セルシオくんのことを少しずつ理解する中で、セルシオくんといいい友達になれそうな気がしたと変わってきたひろしの気持ちを考えることを通して、友達のよい面を見付けていこうとする心情を育てたいと考えた。

(6) 響き合うための研究の手だて

ア 発問の工夫

A ねらいに向き合うための発問

- ・登場人物の考えと自分の考えを重ね合わせ、共感したり反発したりと揺れ動く中で、自分の考えをもつことができるような発問

B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめるための発問

- ・周りの人々とのかかわりを想起し、互いに認め合うことのよさや協力したり働いたりすることの大切さについて考えていく発問

Aについては、ひろしのセルシオくんに対する気持ちが「がっかり」から「好きになった」に変化するまでの気持ちを追うことで、ひろしの気持ちを様々な観点から考えられるように工夫した。これは、特定場面におけるひろしの気持ちを考えるよりも、ある期間におけるひろしの気持ちの変化を考える方が、ひろしの気持ちに対して様々な観点から共感的に迫ることができ、結果的に多様な意見が導き出されるであろうと考えたからである。

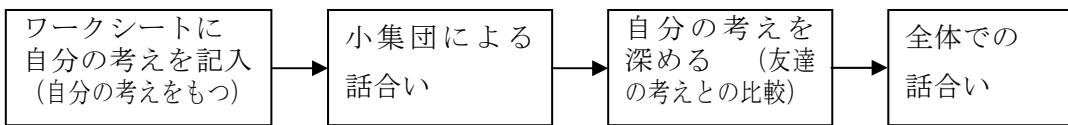
Bについては、これまでの経験を振り返って友達のよさに目を向けさせるような発問をした。ここでは、友達の新しい一面を発見したり、新たなよさに気付いたりした場面を想起させることにより、ねらいとする価値および友達との関係を自分とのかかわりにおいて見つめることができるようにする。互いのよさを認めることで、身近な人と自分とのかかわりについて見つめ直す機会とした。

イ 表現・話合いの工夫

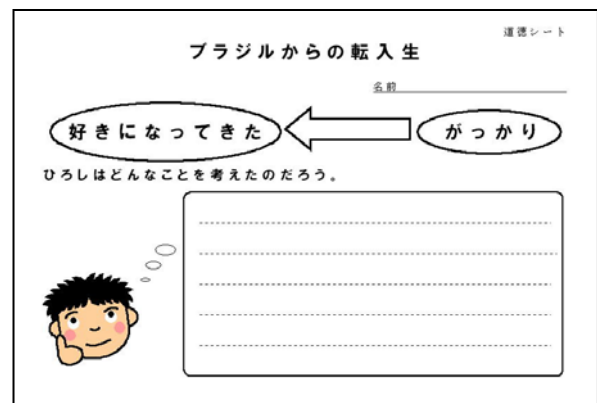
C 自分の考えを表現するための工夫

- ・発問の意図を児童が具体的にとらえやすくなるよう、吹き出しや挿絵などを効果的に用いたワークシートの活用

D 考えを深めるための話合い



Cについては、中心発問の意図を児童が具体的にとらえやすくなるよう、吹き出しや挿絵を工夫したワークシートを作成した。特に「がっかり→好きになってきた」という図式を載せることにより、ひろしの気持ちの変化をとらえるのだということを明確に理解できるように工夫した。また、じっくりと自らの考えをまとめられるよう、時間配分に留意した。



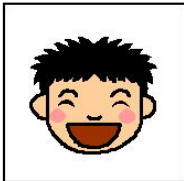
Dについては、小集団で話し合った後に、自分の考えを深めたり見つめ直したりする時間を確保する。そのことにより、全体での話合いで最初の自分の考えをさらに深めた考えを発表できるだろうと考えた。ウ 本時の授業における期待する「響き合う姿」

中心発問において小集団による話合いで互いの意見を交流させ、自分の考えを深めた上で、全体でさらに考えを深めていく発問構成とした。小集団による話合いでは、互いの考えを伝え合うだけでなく、自分の意見と友達の見解とで似ているところや違っているところに気付かせる。このことから、互いに考えを見つめ直し、深めていくこと、また、全体でその考えを伝え合っていくことを「響き合う姿」ととらえ、道徳的価値の一層の自覚が図られると考えた。



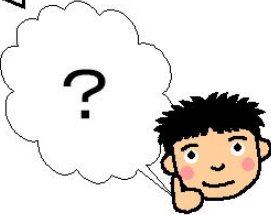
(板書計画)

それから一週間



・・・勝利の手にきめつけたくさい。見付けける。

**友だちづくりが大事なこと**




？

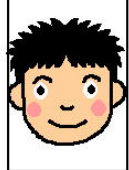
のり子さん、よく気が付いたな  
サッカードキョウのいいところを見付け  
セルシオくんも得意なこともある

ひろしはどんなことを考えた？

日本人が強いはずよね




・・・ほせがかつのかかりがうまくなかった



・・・きつと一組に勝てる。楽しんだらうな。

ブラジルから転入生が来る！

だんだん好きになってきた



セルシオくんはサッカーがうまくなかった

(7) 展開

	学習活動（主な発問と児童の反応）	○指導上の留意点☆個に応じた手だて
導入	1 友達作りへの関心を高める。 ○友達を作るコツって何だろう。	○友達作りへの関心を高め、資料を読むことへの意欲を高めさせる。
展 開	2 資料「ブラジルからの転入生」を読み、ひろしの気持ちを中心に話し合う。 ○ブラジルから転入生が来ると知って、ひろしはどんな気持ちだっただろう。 ・きっとサッカーがうまいだろう。 ・どんな子だろう、楽しみだな。 ○セルシオくんとサッカーをしてみても、ひろしはどんなことを思っただろう。 ・ブラジルから来たのにサッカーが下手だなんて。 ・がっかりだな。 ・せっかく楽しみにしていたのに。	○転入生への期待と同時に、ブラジルというイメージでセルシオくんに一面的な期待をよせているひろしの気持ちを押しさえる。  ○期待が裏切られ、がっかりしているひろしの気持ちに気付くことができたか。
	A ひろしの気持ちが「がっかり」から「好きになってきた」に変わったのは、どんなことを考えたからだろう。（中心発問）	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぼくだってすもうは苦手だ。</li> <li>・サッカーなんて下手でもいい。</li> <li>・みんな得意なことも苦手なこともある。</li> <li>・セルシオくんのいいところを見付けよう。</li> </ul>	○セルシオくんを見るひろしの気持ちの変化を通して、相手のよい面に目を向けることの大切さに気付くことができるようにする。  C ☆ワークシートに自分の考えをまとめられるよう十分時間を取る。  D 小集団での話し合いを生かすために、ワークシートに書いたことにとらわれず、自由に発表してよいことを告げる。
3 自己の振り返りをする。	B これまでの生活の中で、最初にもっていた友達への印象が変わったり、友達のよい面に新しく気付いたりした経験はありますか。それはどんなことですか。	
		○友達のよさに目を向けることの大切さに気付くことができるようにする。 ☆意図的指名をし、様々な経験を出し合うことで考えを深められるようにする。
終末	4 手紙（グッドフレンドカード）を読み、友達に対してさらによいところがないか考える意欲をもつ。	○友達のよいところを見付けようとする意欲をもたせ、それがよい集団作りにつながっていくことに気付くことができるようにする。

(8) 評価 ・セルシオくんを見るひろしの気持ちの変化を考えたか。

- ・一面的な価値観で友達を見ようとせず、友達のよい面を見付けようとする心情が育ったか。

## (9) 考察

### <社会に参加しようとする姿について>

友達のよい面を見付けることによさに気付いたことは、班での活動や係活動の中で頑張っている友達を認める姿につながっていった。また、それが互いに協力する態度に発展してきた。

#### ア 発問の工夫

##### A ねらいに向き合うための発問

ひろしのセルシオくんに対する気持ちの変化を考えるという発問の工夫は、多様な意見や考えを引き出すという点からは有効であった。しかし、その一方で、発問の意味を理解するまでに時間がかかったり、ひろしの気持ちをどのように考えたらよいか分からず戸惑ったりしている児童も数名いた。机間指導や全体に向けての補助発問で補ったが、ワークシートの形式を工夫したり、発問をより分かりやすく提示したりすることが課題として残った。さらに研究を深めたい。

##### B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめる発問

まず、新しい環境に自分がおかれたときや今までの環境に変化があったときなどの気持ち（4月当初のクラス分けや転入生が来たときなど）を想起させた。その結果、友達との出会いや第一印象、そして印象の変化やよい面の発見などをスムーズに思い出すことができた。

#### イ 表現・話合いの工夫

##### C 自分の考えを表現するための工夫

ワークシートでは、「がっかり→好きになった」という図式や、セルシオ君のことを思い浮かべながら考え事をしているひろしの様子を示した挿絵や吹き出しを工夫したことで、児童はひろしの気持ちをより共感的に考えることができた。

今回のように登場人物の気持ちに多面的に迫らせるような意図がある場合、吹き出しの数を一つではなく、いくつか用意するなど、児童が自分の考えをより自由に表現できるようなワークシートの工夫が必要であった。

##### D 考えを深めるための話合い

ワークシートをもとに小集団で話し合うという形式はとても有効であった。小集団の中では、全ての児童が自分の考えを発表することができた。全体での発表の前に、友達の考えに触れることで、自分の考えを再確認し、友達の考えとの違いに目を向けやすくなった。

全体での話合いを「響き合う」ものにするためには、ポイントとなる児童の発言を取り上げて全体に問い直すなどしながら児童の意見や考えをつなげたり、広げたりしていく必要がある。話合い活動は、教師の力量が問われる場であり、「響き合いのある話合い」にするために、教師の指導力の向上が望まれる。日頃から国語科をはじめ様々な教育活動の中で研鑽していきたい。



### 3 高学年分科会（6学年の指導事例）

- (1) 主題名 みんなに奉仕する心 4－(4) 勤労・社会への奉仕
- (2) 資料名 「うちら“ネコの手”ボランティア」 出典『明日をめざして』（東京書籍）
- (3) ねらい 働くことの意義を考え、社会や困っている人のためにすすんで仕事をしようとする心情を育てる。
- (4) 研究主題とのかかわり

<p>&lt;高学年における社会に参加しようとする姿&gt;</p> <p>○自分の役割と責任を自覚し、周囲の役に立てるよう努める。</p>
<p>&lt;高学年における育てるべき力&gt;</p> <p>○働くことの大切さや楽しさに気付く。</p> <p>○身近な集団にすすんで参加し、自分の立場や役割を自覚し、責任を果たす。</p> <p>○友達と共に力を合わせて仕事に取り組む。</p> <p>○誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って行動する。</p>

高学年は、学級集団の中から委員会活動やクラブ活動など学校全体に活動の場が広がりつつある時期である。また、地域の行事や活動に参加するなど、地域社会とのかかわりをもつ児童もいる。児童は年齢を重ね成長とともに家族から友達、学級、学校単位、そして地域社会へと、人とのかかわりの輪を大きく広げていく。

実態調査（p24・5-1）の結果をみると、高学年の児童の47％は与えられた役割に対して「積極的に一生懸命やろう」と考えている。しかし、その反面「きまりだからやる」「したくないけれどしかたがない」と答えている児童も43％見られる。役割に対して、その意義の再認識や充実感を味わうといった指導の工夫が必要と思われる。

本時の授業では、上記の育てるべき力のうち、「働くことの大切さや楽しさに気付く」に重点を置き、働くことの意義を考え、社会や困っている人のためにすすんで仕事をしようとする心情を育てることを主なねらいとした。

自分の役割と責任を自覚し、周囲の役に立てるよう努める児童を育成するために、互いの思いを響き合わせることが有効であるかを以下の資料及び研究の手だてを通して検証することとした。

- (5) 資料について

「阪神大震災後、避難所で必死に働く先生に勇気づけられ、主人公の麻美がボランティア活動に参加する。誠意をもって小学生なりに一生懸命働いている麻美が、「きちんと仕事をしてほしい」と自分では思ってもみなかった苦情を受ける。それでも友達に励まされて最後までボランティアを続け、麻美は働くことの楽しさや大切さに気付いていく。」

この資料で、最後までボランティアを続ける麻美の気持ちを通して、働くことの意義について考え、社会や困っている人のために進んで仕事をするような心情を育てたいと考えた。

(6) 響き合うための研究の手だて

ア 発問の工夫

A ねらいに向き合うための発問

- ・ 児童自身の社会や様々な集団活動へ参加した経験や思いを想起し、働くことへの意義を考える発問

B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめるための発問

- ・ 児童自身のこれまでの地域社会や学校での活動（清掃・当番・委員会・クラブなど）への参加の在り方を想起しながら、働く意義を探究していく発問

Aについては、苦情を受けたときの麻美の気持ちを考えることを通して、自分の意見について様々な角度から考える発問をする。自分の行動を反省したり、文句を言った人に反発したりする友達の発言を聞くことで、自分自身の社会に参加したときの体験や思いを想起させることができると考えた。そして、いろいろな思いをもちながらも、最後までボランティアを続けた麻美の気持ちを考えさせることで働くことの意義に迫ることができるようにした。



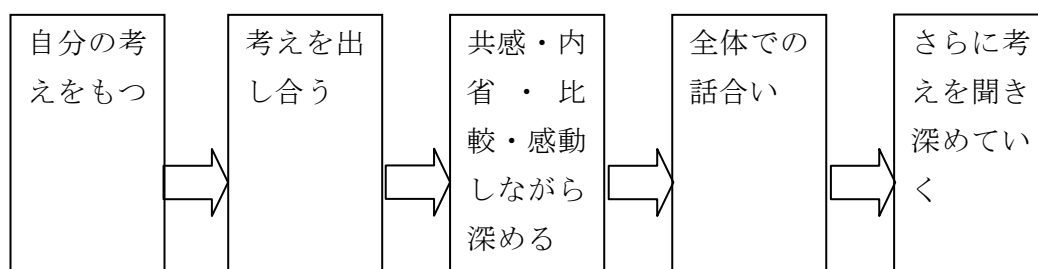
Bについては、児童の様々な経験の中から、働くことの意義に結びつくような体験を引き出すような発問をした。しかし、児童の社会的な奉仕活動の場というものはあまり多くはない。したがって、主人公がボランティア活動をした時の気持ちを重点的に取り上げ、その心情から働く意義を児童が自分のこととして探究していけるように配慮した。

イ 表現・話し合いの工夫

C 自分の考えを表現するための工夫

- ・ 児童自身の社会参加した体験から働くことへの価値付けができるように、テーマ（ねらい）へ導いていくワークシートの活用

D 考えを深めるための話し合い



※ネームプレートを活用した学習活動

Cについては、ボランティア活動をする前と後の気持ちをワークシートに記入させることで、児童は自分の気持ちの変化を整理することができ、自分の思いをより表現しやすくなると考えた。机間指導の際に、児童自身の体験がワークシートに記入できるよう個別に声をかけた。

Dについては、中心発問でネームプレートを使った意志表示の工夫を行った。

まず、中心発問で自分の考えをもつ。そしてその後に、ネームプレートを自分の考えに近いところに貼り、意見表明をより明確にした後に、考えを出し合った。

友達の考えに触れることで、共感・内省・比較・感動しながら自分の考えを深める。その後、全体の話合いをもつことで、多くの考えを聞き、自分の考えをさらに深めることができる考えた。

ネームプレートを全員に貼らせることに関しては、児童の考えが明確にとらえられることにより教師側がねらいに沿って意図的に指名を行った。更に、ネームプレートを動かす場面を設けることで、心の揺れや変化を見取ることが可能になった。

また、なかなか自分の考えが整理できない児童には補助発問をすることによって自分の考えが明確にできるようにした。



一方、児童は、ネームプレートが貼ってある黒板を見ることにより互いの思いを知ることができる。また、ネームプレートを見ながら、周りの人と麻美の気持ちについて話し合った。友達の考えを視覚的にとらえることにより、話合いへの参加意識も高まると考えた。

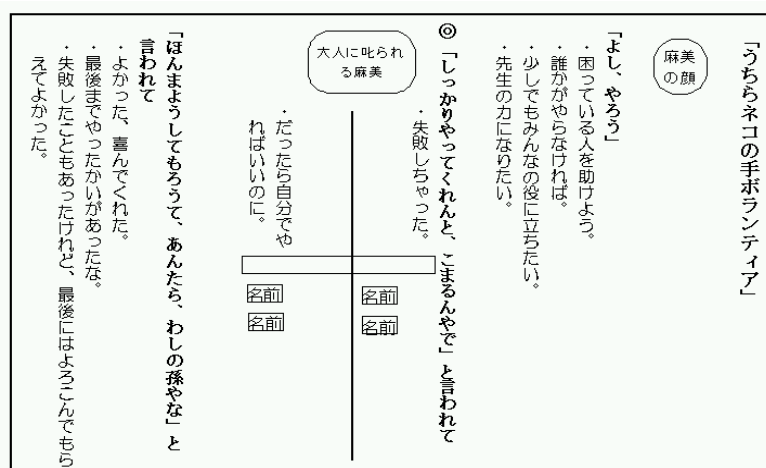
#### ウ 本授業における期待する「響き合う姿」

自分の考えをもち、意見を伝え合う中で、大人から苦情を言われた麻美の気持ちを様々な角度から考えられるようにした。そこで、自分の考えが揺るぎないものになったり、友達の発言と比べて違いやよさに気づき、考えが変わったりすることを「響き合う姿」ととらえた。

そして、これらの話合いを通して自問自答し、自分の考えを見つめ直すこと、友達と意見を伝え合うことで、よりねらいとする価値に気付くことも「響き合う姿」と考えた。

また、振り返りのワークシートに今までの自分の経験を書き、それを伝え合うことによって道徳的価値の自覚を児童が互いに高め合うことも「響き合う姿」ととらえ、いずれもねらいの達成にむけて有効であると考えた。

#### (板書計画)



(7) 展開

	学習活動（主な発問と児童の反応）	○指導上の留意点 ☆個に応じた手だて
導入	1 震災の写真を見る。 ○写真を見て、どんな気持ちになりましたか。 ・怖い。 ・住んでいる人はどうしたんだろう。	○震災の写真から、当時の状況とともに、住民たちの気持ちを想像するよう促す。
展開	2 資料を読み、話し合う。 ○麻美は、どんな気持ちから「よし、やろう。」と言ったのでしょうか。 ・困っている人を助けよう。	○周りを見て、みんなのためにがんばろうとする麻美の気持ちをおさえる。
	A 「しっかりやってくれんと、こまるんやで。」と言われとき麻美はどんな気持ちだったでしょう。（中心発問）	
	<反省する気持ち> ・ちゃんと仕事をしなければいけないな。 <苦情を言った大人に反発する気持ち> ・だったら自分でやればいいのに。 <苦情を言った大人に同情する気持ち> ・子どものことが心配なんだな。	○苦情を言われてもボランティアを続けた麻美の気持ちを考えさせる。 D 反省と反発の気持ちをネームプレートで整理し、それぞれの意見を聞いた後、考えの変わった児童にネームプレートを移動させる。 ☆ 悩んでいる児童には補助発問をする。
	A どうして麻美は最後までボランティアを続けたのでしょうか。	
	・自分の責任を最後まで果たしたかったから。 ○「ほんまようしてもろうて、あんたら、わしの孫やな。」と言われたとき、麻美はどんな気持ちになりましたか。 ・最後までやったかいがあったな。	○最後まで仕事を続けた麻美の気持ちから働くことの意義に気付かせる。 ○感謝されたときの麻美の気持ちから働くことの喜びを感じさせる。
	3 自分の経験を振り返る。	
	B 働いてよかったと思うことはありますか。	
	・理科室の掃除を一生懸命やったら、理科室を気持ちよく使えるようになってよかった。 ・放送委員会の仕事をがんばったら、楽しい放送を流すことができ、みんなに喜んでもらえてよかった。	☆意図的指名をする。 C ワークシートに書くことで、自分の働いた経験を振り返らせる。
終末	4 教師の説話を聞く。 ○学校の様々な場面で活躍する6年生の姿を伝える。	○仕事は、自分だけでなく社会生活を支える大切なものであることに気付かせる。

(8) 評価 ・働くことの意義を考えることができたか。

- ・話し合いを通して友達の考えを受け止め、自分の考えを深めることができたか。
- ・社会や困っている人のためにすすんで仕事をしようとする心情が育ったか。

## (9) 考察

### <社会に参加しようとする姿について>

仕事の意義について考えたことで委員会や地域の活動において働くことに見いだし、周囲の役に立とうと意欲的に活動する姿が見られた。

### <響きあうための研究の手だてについて>

#### ① 発問の工夫

##### A ねらいに向き合うための発問

苦情を言われたときの主人公の気持ちを考える中心発問でねらいに向き合い、そしてその後で、苦情を言われてもボランティアを続けた理由を問う発問をすることで、働く意義についての考えをさらに深めさせようと考えた。中心発問では、指導者側の想定通り「反省」「反発」両方の立場からの意見が出た。また、その自己の考えを土台として次の発問をすると、「責任感」「困っている人のために…」など、ねらいに向き合うだけではなく、本実践で目標にしていた“働く意義”に迫る発言も出てきた。

##### B 社会（集団）とのかかわりを見つめるための発問

ボランティアや地域において役割をもって活動した経験をもつ児童はそれほど多くない。そこで、学校や学級の中での仕事についても含めて考えられるような発問を工夫することで、それぞれの児童が自分の経験に応じて考えることができていた。また、働いているときの思いや働いたあとの気持ちを聞くことで、児童は働くことの意義についてより深く考えることができた。

#### ② 表現・話し合いの工夫

##### C 自分の考えを表現するための工夫

展開後段の振り返りで、資料の主人公の気持ちと重ね合わせながら記入できるように、自分が経験した活動の気持ちの流れや変化を書き込むワークシートを活用した。なかなか記入できない児童については机間指導で個別に声かけをした。自分の経験を詳細に想起し考えを整理することで、自信をもって発表することができた。より表現しやすいものとするためには、ワークシートへの記入方法をさらに形式化する必要もあると考えた。

##### D 考えを深めるための話し合い

ネームプレートを使ったことにより参加意識が高まり、自分の考えや立場を明らかにした上での意見交換を行うことができた。また、なかなか意見を言えない児童にとっても自分の考えを表明する機会を得ることができた。指導者側としては、ネームプレートを使用することで、子どもたちの思考を把握し整理することができ、個々の児童に対して適切な補助発問や意図的指名ができた。児童の考えを単純に色で分けて良いのかという問題やどの発問でプレートを使った意思表示をさせるとより効果的なのかという問題がある。また、意思表示そのものも二者択一として考えられるものではない時もあり、想定している答えによってその使い方にも工夫が必要であると考えた。本時であれば、「反省」⇔「反発」ではなくて、苦情を言われても「続ける」⇔「やめる」という2つで考えたほうが働く意義について考えを深めることができたのではないかと思われる。

## IV 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

#### (1) 発達段階に応じた社会参加の姿をふまえたことについて

発達段階に応じた「社会に参加しようとする姿」と「育てるべき力・態度」を明確にしたことにより、系統的に道徳的価値の重点化を図った指導を進めることができた。

互いの心に響き合う授業を展開したことで、児童は友達との意見交換を通して多様な感じ方や考え方に気づき、自らの道徳的価値の自覚を深めることができた。また、各授業の展開後段において友達や集団のよさ、社会参加の経験などを振り返る場面を設定したことで、児童に自分とのかかわりにおいて道徳的価値をとらえさせることができた。

学校生活においては、友達と協力して係や委員会活動に取り組んだり、今まで気がつかなかった友達の優しさや努力に目を向けたりするようになるなど、集団や社会に意欲的に参加しようとする意識の高まりが見られた。

#### (2) 互いの心に響き合う授業を展開したことについて

##### ア 発問の工夫

###### A ねらいに向き合うための発問

主人公の置かれた状況や立場を明確にし、中心発問で自分の価値観を基に、様々な角度から主人公の気持ちを考えさせることで、よりねらいに迫る考えを引き出すことができた。

###### B 社会（集団）と自分とのかかわりを見つめるための発問

学校や地域において、児童全員に共通した体験がないことを考慮し、展開後段でそれぞれの児童の体験に応じて考えることのできる発問を工夫した。その工夫により、社会（集団）と自分とのかかわりに目を向けさせることができた。

##### イ 表現・話合いの工夫

###### C 自分の考えを表現するための工夫

発達段階に応じたワークシートの内容を工夫することで、自分の考えを整理し、深めることができた。それにより自分の考えに自信をもち、発言する児童の姿が見られた。低学年では、動作化や劇化を取り入れたことで友達の演じる姿を通して、友達と自分との道徳的価値のとらえ方に対する相違点に気付くことができた。

###### D 考えを深めるための話合い

小集団で話し合うことで普段発言できない児童が友達に自分の考えを伝えることができたり、友達の考えをじっくり聞いたりすることができた。また、話合いを通して道徳的価値に対する様々なとらえ方があることを知ることで、価値についての理解が深まった。その結果、友達の発言を聞いて自分の考えが変わったという児童の発言が認められた。

### 2 今後の課題

元来、社会（集団）参加に対する関心が高かった児童の変化が認められたのに比べ、社会参加に対する関心あまり無かった児童の学校生活における変化について、把握することは難しかった。今後は、このような児童に対する指導の手だてを一層工夫することで、すべての児童に道徳的価値の自覚を深めるとともに、児童の変容をいかに教師の側が評価していくか、短期的・長期的に、どう道徳的実践意欲を高めていくかが課題である。

## V 実態調査

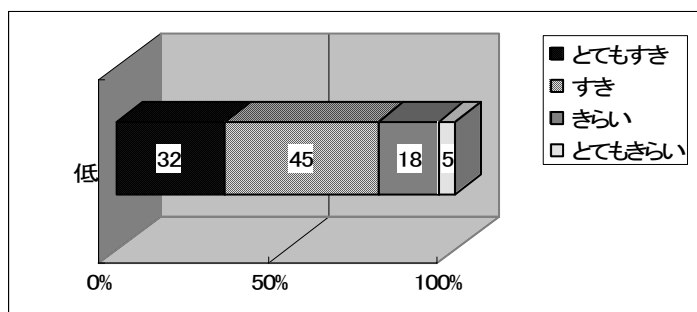
都内の小学校1年生から6年生（計1725名）を対象として質問紙法で実施した。  
質問内容は大きく次の2点である。

- ・ 道徳の時間を通して自分の考えをもつこと、友達と比較すること、さらに自分の考えを深めることができているのか。
- ・ 社会参加への意欲や意味をどの程度意識しているのか。

（※ 質問内容・表現は、発達段階に応じたものとなっている。）

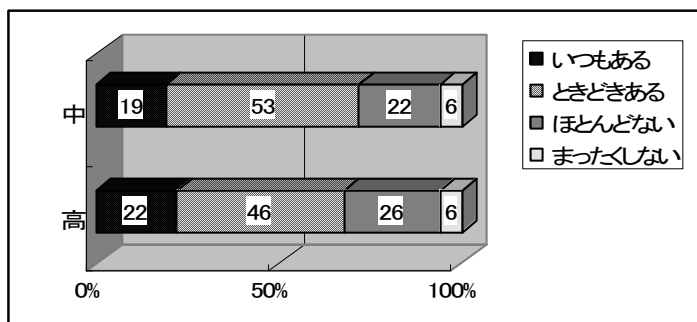
### 道徳の時間における調査

#### 1-低 あなたは、道徳の時間で、発表するのは好きですか。



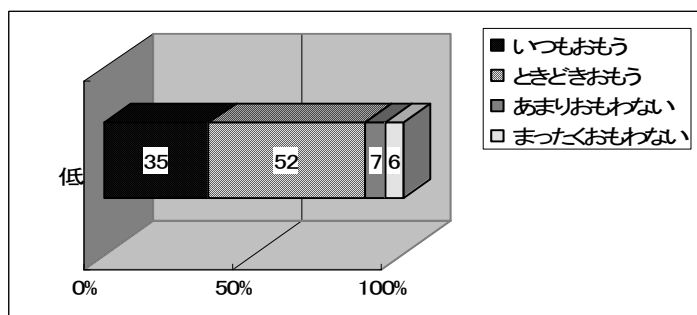
全学年児童の約70%以上が、道徳の時間に自分の考えをもったり発表したりしている、と回答している。その一方で、中、高学年では約30%の児童が「ほとんどない」や「まったくしない」と回答している。

#### 1-中・高 あなたは、道徳の時間で自分の考えをもったり、発表したりすることがどのくらいありますか。

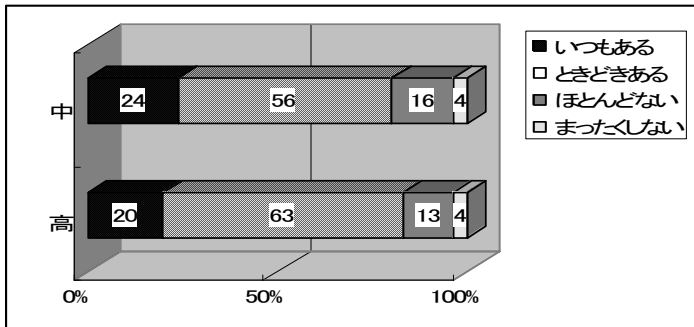


低学年で道徳の時間で発表することが好きだと回答している児童が、77%いるが、中、高学年と学年が上がっていくにつれて、自分の考えを発表するという割合は減っていることがわかる。

#### 2-低 友達の発表を聞いて、「いい考えだなあ」とか「なるほど」などと思うことはありますか。

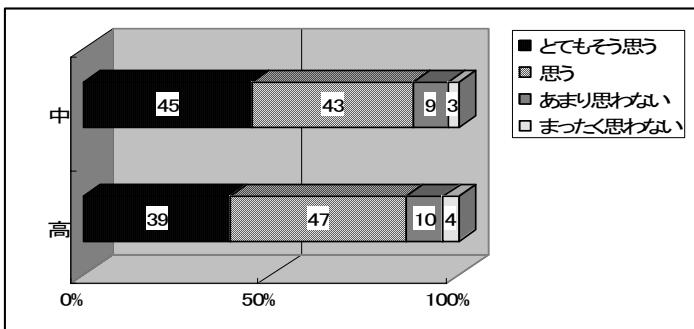


2—中・高 友達の考えを聞いて、自分にはなかった新しい考えをもったことがどのくらいありますか。



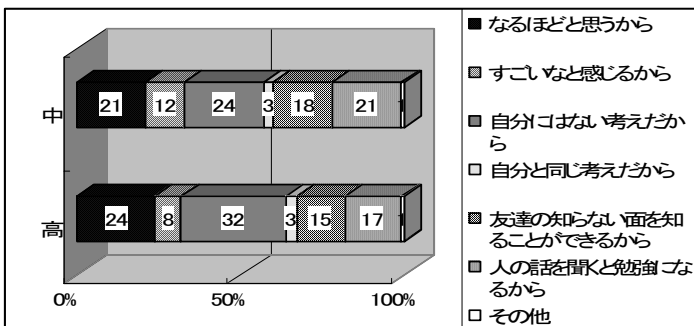
友達の考えを聞くことで自分にとって新たな考えをもつことができる児童は、80%強であった。低学年に関してはその傾向が強い。しかし、中、高学年では否定的な回答が増えている。

3—中・高 道徳の時間、友達同士で考えを出し合うことは良いことだと思いますか。



約90%の児童は、「友達同士で考えを出し合うことは良い」という肯定的な回答をしている。しかし、10%以上の児童が考えを出し合うことに否定的であった。

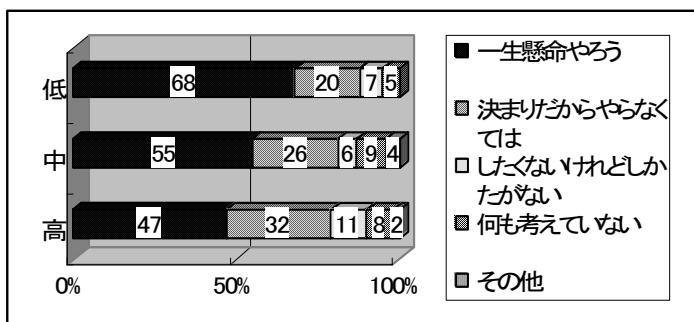
4—中・高 友達同士で考えを出し合うことが良いと思う理由は何ですか。



中・高学年とも「自分にはない考えだから」が理由として一番多く挙げられている。友達と意見を交流させることで、新しい考えを知ることができることを良いことだと感じているようだ。

学校や家庭での仕事についての調査

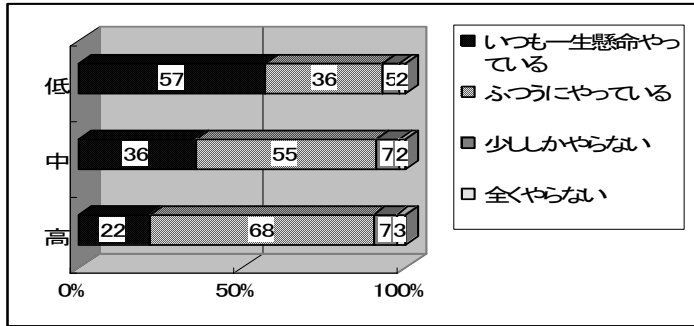
5—1 学校での仕事をどのような気持ちでおこなっていますか。



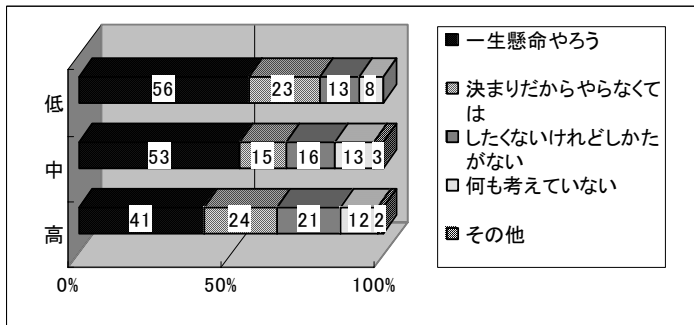
学年が上がるにつれ「一生懸命やろう」という思いで取り組む児童が減少している。その一方で、「したくない」や「何にも考えていない」という回答も学年が上がるにつれて見られた。



5-2 あなたは学校での仕事をどのくらいやりますか。

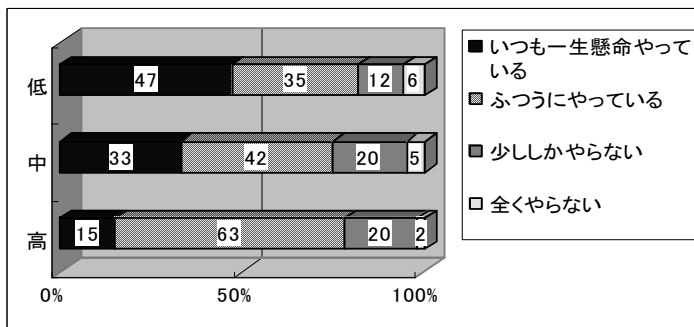


6-1 家での仕事をどのような気持ちでおこなっていますか。



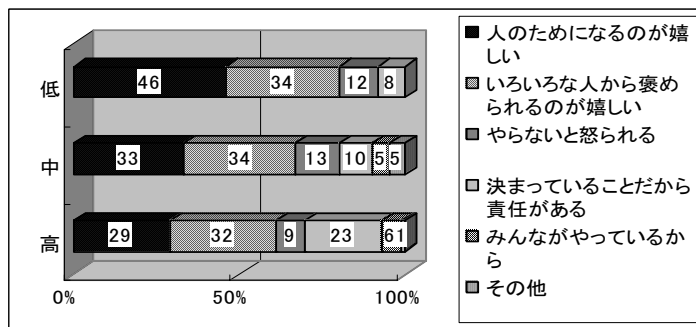
低・中学年は、50%以上の児童が前向きな気持ちで仕事に取り組んでいる。しかし、高学年では41%と減り、「しかたなくやる」といった回答が増えている。

6-2 あなたは家での仕事をどのくらいやりますか。



同じ質問項目で活動場面が家となると、さらに積極的に仕事を行う児童が減少している。それに伴い、「少ししかやらない」や「全くやらない」と回答した児童が増加している。

7 どうして「仕事をしよう」という気持ちになりますか。



低学年では仕事に対し、人のためになることだと思えたり、褒められたりすることが嬉しかったりと前向きな気持ちで取り組んでいるが、学年が上がるにつれその割合は減少している。

高学年では「やらないと怒られる」、「決まっていることだから責任がある」といった、受動的な回答が約40%と増えている。

## 平成17年度 教育研究員名簿 (小学校・道徳)

	区市町村名	学校名	氏名
低学年分科会	足立区 町田市	寺地小学校 三輪小学校	田口 陽子 ○富川 克子
	港区 江東区 大田区 東村山市 青梅市	麻布小学校 辰巳小学校 久原小学校 大岱小学校 友田小学校	石井 克子 大庭 美幸 菅生 知子 ○林田 孝子 ★樋口 純子
中学年分科会	八王子市 小金井市 武蔵村山市 北区	第四小学校 東小学校 第三小学校 王子小学校	久保田大介 平野 由美 ○小林 忍 望月 伸司
高学年分科会	目黒区 中野区 豊島区 葛飾区 八王子市	中目黒小学校 丸山小学校 要小学校 北野小学校 由井第一小学校	★吉田 神奈子 岡山 るり子 澤井 典子 ○辻 真 小俣 美幸
	墨田区 世田谷区 渋谷区 杉並区 練馬区 武蔵野市 国立市	八広小学校 桜丘小学校 本町小学校 富士見丘小学校 開進第三小学校 井之頭小学校 国立第六小学校	上澤 亮一 木村 広明 ☆横山 公一 若林 寿弥 増戸 貴弘 ○星野 弘毅 平田 徹郎

\*各分科会・グループ内は学年・行政番号順 ☆ 総世話人 ★ 副世話人 ○ グループリーダー  
担当 東京都教職員研修センター 統括指導主事 鈴木 邦夫  
指導主事 横山 圭介

### 平成17年度教育研究員研究報告書

〔 東京都教育委員会印刷物登録  
平成17年度 第12号 〕

平成18年1月16日

編集・発行 東京都教職員研修センター  
所在地 東京都目黒区目黒一丁目1番14号  
電話番号 03-5434-1974  
印刷 株式会社 今関印刷